

# 黒潮祭

作成日 平成 25 年 11 月 11 日

作成者 伊藤創平（高知大学学生ボランティアセンター）

高知大学学生ボランティアセンター（SVC）伊藤です。私たちは、「災害時に大学が地域の支援拠点となる」ことを目指し、活動を行っています。といっても、パッと何をする団体かわからないと思うので、もう少し説明させていただきます。まず、活動は大きく二つに分かれます。

①学生と大学近隣地域をつなげる活動。これは、避難所を考えていただければわかるように、近隣地域の人と学生の面識がなくコミュニケーションがなければ一緒にその危機を乗り越えようと思いませんよね？だから日頃から、地域の中でコミュニケーションをとっておく。そのために、この活動を行っています。

②県外の学生とつながる活動。これは、主に被災地支援を通じた活動です。

①の活動で私たちが目指すのは災害時にも一緒に頑張ろうという意識をつくり、学生がリーダーシップを持って復旧復興へ行動していくというビジョンです。ですので、学生は日頃から防災意識を高め、少しでも災害に対しての知識や経験を持つておく。そのために、この活動を行っています。

しかし、①と②を別々にしておくのは、もったいない。せっかく自分たちは地域と被災地のどちらもつながりを持っているのだから、これからは被災地の人たちにもこの計画に携わってもらって、より災害に強いまちづくりを行っていこうと考えました。

そこで、11月2日、3日の土日に行われた、高知大学の学園祭「黒潮祭」で、「地域と被災地」をテーマにイベントを行いました。

近隣地域からは、まちづくり活動を一緒にさせていただいている「朝倉まちづくりの会」の方々。そして被災地からは「福島大学災害ボランティアセンター」の学生をお呼びしました。そして、その二つをつなげるべく、学生ボランティアセンターを核とした地域や被災地支援の活動を行っている団体とのユニットをつくりました。組織体型としては、以下のようになります。

朝倉→浪江

モザイクメッセージづくり

しし汁班

大豊町 燈の出や

紹介

わたがし班

歴史キャンパス

朝倉まちづくりの会

ツアー班

守るんジャ

SVC まちづくり  
チーム

SVC

ESWIQ &  
学生有志

SVC 福島チーム

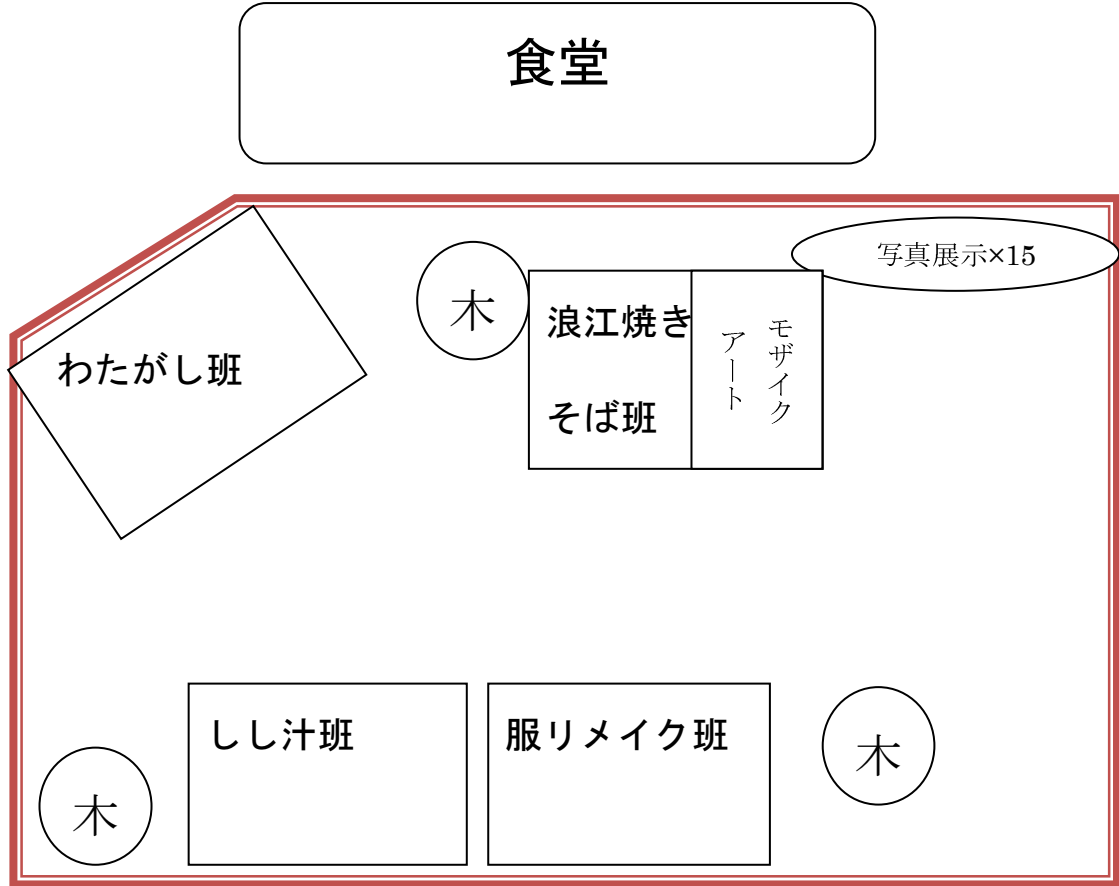
地域有志の方

福島大学災害ボラン  
ティアセンター

服リメイク班

浪江焼きそば&  
トークセッション班

各々の出店場所



食堂前広場

以下、その模様をレポートします。まずは、わたがし班から。



このブースでは、わたがしとコロコロゲームを行いました。運営は、朝倉地域で日頃の小学生の下校を見守る活動している、「守るんジャー」にメインで行っていただきました。守るんジャーは、8年ほどの活動を通して、子どもや地域の方と深いつながりを築いています。そして、地域の側からはいつもお世話になっている「朝倉まちづくりの会」の方々が来てくださいました。このブースで使わせていただいたセットは、ほとんど地域の方からの持ち寄りのものです。綿菓子機など、なかなか学生だけでは、手に入らないものをいろいろ貸していただきました。お子さんはもちろん、学生にも大好評でした。特に、学生には綿菓子作り体験が人気で「あー、懐かしい」と言いながら、楽しそうにわたがしを作っていました。そこに地域の方が「あんた、もっと早くまわしーや」「いい感じいい感じ」などアドバイスをいただくことで、少しでも交流ができたのではないかと思います。

そしてこの日、最も人が集まり盛り上がったのが、新高梨の試食会でした！！



(写真：新高梨を切り分ける朝倉まちづくりの方々)

実は、まちづくりの会の会長さんが高知市針木地区（朝倉に含まれる）の方で、最高級の針木新高梨を差し入れてくださったのです。これで人が集まらないわけがありません。食べに来た大学生や子どもたちには、「新高梨クイズ」を即興で敢行しました。やはり、大学生は「えっ、これこんな近くで作られてるの?」といった感じで、あまり知られていなかった様子でした。しかし、しっかり驚いてくれたので、次にスーパーで見かけたときは、針木のことを思い出してくれるのではないのでしょうか。加えて、写真の横には、針木のなし祭りの様子を展示しました。

次に、紹介するのは二日目の午後から行った、「第四十四連隊跡地を訪う」歴史キャンパスツアー班です。アテンド役の弘田吾郎さんは、朝倉まちづくりの会にて、歴史に関しての地域活動に長く携わられており、朝倉地域の歴史に関して、最も詳しい方の一人です。このイベントは SVC の中で、歴史に関心が高い学生が集まって、企画をしてくれました。



(写真は、ツアーを始める前に学生食堂前で弘田氏があいさつする様子)

このツアーは、未だキャンパスに残される弾薬庫や碑石など、今も息を潜めて眠っている歴史の跡を弘田氏により、少しずつひも解き、語り継ぐといったものです。いつも使っているキャンパスへの新しい発見とともに、かつてのこの土地の姿が少しずつ浮かび上がり、大学での楽しみがまた一つ増えたように思います。

続いて、服リメイク班です。ここは、地域と関わりの深い学生有志と学内の環境団体「ESWIQ」とが共同で運営を行いました。地域からは、講師として、運営にあたった学生と個人的なつながりのあった方をお呼びしました。まず ESWIQ からご紹介します。ESWIQ は服のリサイクルなどを通して環境を考える活動を行っています。継続的に、学内や旭の高知市旭町にあるソーレという公共の施設で「服もってけおいてけ市」という無料のフリーマーケットを行っています。その場が図らずも地域と学生の交流の場になっています。また、偶然出会った、(今回、来ていただいた) 地域の方と元々交流があり、得意の裁縫を学生に教える機会を用意できないかと今回の企画になりました。

何度か学生有志、地域の方、ESWIQ、僕の4者で話を進めるうちに、ESWIQ が持っている要らなくなった服を使って、地域の方の指導のもとアクセサリなどの小物を作ることができないかということになりました。しかし、それぞれの特技を活かしながら、目的に沿ったものを考えていくのは、なかなか骨の折れる作業でした。僕としては、考えていく場自体を作らなければいけません。それぞれが団体であったり個人であったりしたので、各々の立場を尊重するのがとても難しく、常に緊張感がありました。連絡方法や場のづくり方など気を配るところは無数にありましたが、それゆえ押さえておくべきポイントを見分ける習慣ができました。「これを押さえておけば、あとは当日で大丈夫だろう」という取捨選択ができるようになったのは、とても良かったと思います。



(写真、左は学生と一緒に小物作りをしている様子、右は出店全体の様子)

当日は、周り少し雰囲気を変えて、比較的ひっそりと、ゆっくりした時間の中で地域の方と学生の交流をつくることができました。おそらく、やることだけでなく、それぞれの個性や人となり運営する人同士が共有できたので、こういう雰囲気のできたのではないかと思います。

4つ目は、しし汁班です。運営は、大豊町からお越しいただいた「燈の出や」さんです。



(写真は、学生がデザインしたポスターと出店の様子)

この「燈の出や」さんは、大豊町の立川でジビエ料理をふるまわれている旅館です。もともと、あさくらまちづくりに参加されている教育学部の菊地先生から、「一緒にやってみませんか?」というご提案があり、このような形になりました。

最初は、僕自身ジビエのことは何も知らず、加えてお会いしたことのない方に一緒に出店していただくことに不安がありました。しかし、お電話させてもらい、お人柄に触れ、ジビエを広めたいというお気持ちに触れるなかで、少しずつその気持ちが一緒にやったら楽しいかもしれないという好奇心に変わっていったように思います。当日初めてお会いしたのですが、電話で想像したとおりの方でした。また初めてのジビエも「うまい!!」の一言でした。今までの印象では、筋肉質でゴワゴワしていて、特に獣の匂いが・・・というイメージでしたが、この時頂いたものは正反対でした。柔らかくてジューシー、臭みもなく、それでいてあっさりしているのが印象的でした。「これは、行ける!!」と思ったのですが、なんと、1日で100杯(予想の2倍以上)の売り上げとなりました。ご都合により、初日だけの参加でしたが、「来年もまた」ということで、来年はぜひ単独でブースを構えて盛大にやっていただけたらと思いました。とてもいいご縁に感謝するとともに、興味がわいたので、次は大豊に行って味わってみたいと思いました。

次に、被災地との交流をテーマに出店してくれた浪江焼きそば&トークセッション班です。運営は9月に福島で災害ボランティアを行った SVC メンバーと、その時に現地とのコーディネートをしてくれた、福島大学災害ボランティアセンターの方々です。



(写真は、左が出店の様子。右が完売した時の集合写真)

浪江焼きそばは、2013年の「B級グルメグランプリ」で優勝したご当地焼きそばです。初めて食べたのは、浪江の方々が住む仮設住宅でした。麺の太さが特徴のこの焼きそばを、振舞ってくれた方が「どうや、うどんみたいやろ！」と自慢げに浪江のことを話してくれたのをよく覚えています。おそらく、この食べ物がそこに住んでいた方々にとって故郷とつながっているのだなと感じました。ぜひ、これを通して福島の方々の思いを伝えたいと企画をしました。しかし、これを食べた人全員にその思いを口で伝えられるわけではありません。どうすればいいのかと考え、工夫した結果、福島大学生を呼び一緒に調理することで関心を持ってもらう。加えて、福島の現状を伝えるパネル展示やトークセッションも同時開催し、より深く知ってもらうというものでした。トークセッションは私が担当したのですが、少人数で密な会話が出来たように思います。特に印象的だったのは「復興とは何か？」というトピックを話しているとき、この黒潮祭での例をとり「浪江焼きそばが被災地のもだから売れている今の状況ではまだまだ、復興は遠い。これが、おいしいから買ってもらえるようになって初めて福島が復興したと言えるのではないか。」という言葉です。そのように考えると、運営スタッフが心がけていた、福島の「いいところ」を見て欲しいという気持ちにも通じるのではないかと思います。





(写真は、トークセッションを行う SVC メンバーと福島大学災害ボランティアセンターのメンバー)

そして、最後に今回のメインテーマである「地域と被災地」をつなげたモザイクメッセージについてです。これは、ESWIQ メンバーが主体となり、お客さんや運営者全員が参加して作成しました。方法としては、ESWIQ が持っている要らなくなった服を 8 cm ほどの四角に切り分けて、その布に、運営した人、お客さん、通りかかった方々に、福島へのメッセージを書いてもらいます。そのメッセージの書かれた切れ布を白い大きい布に貼っていくというものです。これは、本当に最後の最後でやっと出てきたアイデアで「みんなが参加できて、ここ朝倉と福島をつなげる企画はないものか」と長い時間みんなで話し合いました。



(写真は、左が今回の企画を説明する様子。右が切れ布に「福島へのメッセージ」を書く様子)



(写真は、たくさんの方の貼り付けられたメッセージの隙間を埋め、仕上げを行う ESWIQ  
メンバー)

完成品はこちらです。



(写真は、学生祭打ち上げ後高知大学生から福島大学生に渡された時の集合写真)

ご覧のとおり、メッセージで埋め尽くされた白い布からは「絆」という文字が浮かび上がっています。震災後よく聞かれるこの言葉。使い古された感のあるこの言葉を使うのは、始め抵抗がありました。「僕らだけのオリジナルな言葉がいい」。そう思いました。しかし、作っているうちに少しずつ考え方が変わっていきました。このイベントは今年初めて行い、多くの人が一一つ試行錯誤しながら、たくさんの時間と思いの詰まったものをつくろうと必死に動いてくれました。今まで、深く知らなかった他団体のメンバー、福島の方、地域の方、そして今まで一緒にやってきた SVC のメンバー。同じものを目指し、必死に成功を望んだ、その一人一人と強い絆ができたのではないかと思います。ほかの誰とも一緒ではない、僕らだけの絆。

そして最後に一番印象に残った話を。今回、準備の段階からたくさんの方にご協力していただきました。当日には椅子や机、わたがし機まで借していただきました。そのため、二日間「ありがとう」連発でした。そうすると、今度は、(この企画を) やってくれて「ありがとう」という言葉がたくさん返ってくることに気がきました。その時、「やってよかったな」と思う一方、このようなどちらもがお互いの役にたち、感謝し合う。そんな関係が地域でも被災地に対してもとてもいいのではないかと思います。関わっていただいた全ての方に心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。